大分県立芸術文化短期大学研究紀要　第35巻（1997年）

アーノルドの教養観（その２）
『教養と無秩序』当時の社会的背景について

Matthew Arnold's Conception of Culture (2)：
On the Social Background in the Days of *Culture and Anarchy*

後　藤　一　美
Kazumi Gotoh

本稿は『教養と無秩序』発刊当時のイギリスの、主として歴史的・社会的状況について考察したものである。『教養と無秩序』は1869年に発刊されたものであるが、この19世紀中葉のイギリスは、その歴史上かつてなかった急速かつ多面的な社会的変革と混乱、換言すれば「無秩序」状態に直面していた。この時期のイギリス社会を特徴づけるものは、一口に言えば産業革命による機械文明の進展である。機械文明はイギリス社会に経済的繁栄をもたらすとともに、イギリスの政治から人々の「心」の在り方に至るまで広範囲にわたって影響を及ぼしている。本稿では『教養と無秩序』執筆の契機となった当時の「無秩序」を、「政治的・社会的無秩序」と人々の「精神的無秩序」に大別して考察してみた。

まず前稿のまとめから入ることにしよう。

教養の概念（前稿のまとめ）

前稿「アーノルドの教養観（その１）」[1]において、私は教養（culture）というものの定義づけの難しさを指摘しつつも、教養の内包する概念をいくつか挙げてみた。それらをまとめて列挙すると、およそ次のようになる。すなわち――

1）教養は芸術、学問などの高次な文化と関連している。
2）教養とは人間形成に根本的、第一義的に必要な文学・哲学など人文的知見をいう場合がある。
3）教養とは人文的なものだけでなく、社会・自然科学を含む総合的な知見、いわゆるリベラルアーツ的なものをいう場合もある。
4）教養には知識の人間化、社会化の観念が含まれる。すなわち、単にアカデミックな知識や狭い専門的な知識は教養の概念になじまない。
5）教養の属性には知性や洗練が含まれる。
6）教養には人間形成、人格完成という人間の理想像の観念、道徳観念が含まれる。
7）教養には美や創造の観念が含まれる。
8）教養の獲得には豊かな想像力が必要である。
9）教養とは主として政治的教養のことである（三木清）。

前稿でも述べたように、教養には明確な一定の定形（定義）があるわけではない。その時代や社会、あるいは民族によっても教養の内容は違い得るし、個々人によっても当然違い得る。列挙した上の例も、教養の中核に何を置くかは個々人によって違い得ることを示している。哲学者がこの世の存在すべては「真」か否かに分けられると言えば、倫理学者・道学者は存在すべて「善」か否かに分けられると言うであろう。美学者・芸術家がこの世の存在すべては「美」か否かに分けられると言えば、宗教家は存在すべて「聖」か否かに分けられると言うかもしれない。あるいは、「知行合一」という中国や日本に古くからある思想・道徳観が示すように、実践を重視する人は、実践をともなわない単なる知識や観念を机上の空論、あるいは「虚学」として、およそ教養と呼ぶに値しない、というもっともな立場を取るかもしれない。

教養観には如上の差異、すなわち時代・社会・民族、あるいは個々人による教養の内容の差異、あるいは力点の差異はありえても、列挙した上の例は、教養に関するもっとも一般的かつ本質的な定義を、ほぼ全面的に含んでいると言い得る。

独特無比の教養観

アーノルドの教養観も列挙した上の例にほぼ沿ったものであるが、教養の中核に文学的教養、とりわけ詩的教養を据えたという点で独特無比の風格を持った教養観をなしている。例えばアーノルドは、『教養と無秩序』のなかで次のような考えを述べている。すなわち教養とは「美と英知の性格を兼備する完全」(a perfection in which the characters of beauty and intelligence are both present)であるとした上で、

In thus making sweetness and light to be characters of perfection, culture is of like spirit with poetry, follows one law with poetry.

（かように優美と英知を完全の性格とする点で、教養は詩と同様の精神を持ち、詩と同一の法則に従う）

と述べているのである。およそ他の教養観には見られない独特の言であろう。

前稿でも触れたが、アーノルドの教養観を示している代表的な著作は『教養と無秩序』であり、それには「政治的および社会的評論」という副題が付いている。『教養と無秩序』は、第一義的には当時のイギリスの政治・社会状況を念頭に置きながら、その政治・社会を理想的方向に向かわしめることを念じて執筆されたものなのである。

政治と社会の前進にとって、なぜ詩的教養が必要なのか。詩的教養が、どのようなメカニズムによって政治と社会の前進に結びつくのだろうか。アーノルドのこのような審美的論調は、けだし多くの人々にとって奇異な感じを持たれるに違いない。私もこれまで多くの教養論、あるいは教養に言及している教育論に接してきたが、教養の本質を詩的教養であるとし、詩的教養を政治と社会の前進にまで結びつけた教養論に接したことは一度もない[(2)]。

以下、『教養と無秩序』発刊当時、イギリスが直面していた歴史的・社会的状況を見てみることにしよう。

何が「無秩序」なのか

まず『教養と無秩序』中の「無秩序」とは何かについて見てみよう。

『教養と無秩序』の内容を端的に言えば、およそ次のようになる。すなわちアーノルドは、この書の執筆当時の政治と社会が混乱しており、人々が依るべき権威ある思想・行動様式が存在していない、つまり無秩序状態であり、従って人々が依るべき真の教養（秩序）が政治と社会にとって必要である、と言うのである。

『教養と無秩序』が出版されたのは1869年、アーノルド47歳の時であり、そこにいうイギリスの政治・社会的状況とはこの頃の状況を指している。一体アーノルドは、当時の社会状況にどの程度通暁していたのであろうか。あるいは深刻な階級意識・対立が普通だった当時の社会的風土の中にあって、どれほど偏見なき立場に立ってその教養論をものしたのであろうか。アーノルドの置かれた立場とこの頃の時代状況を、アーノルドの研究家として知られる Dover Wilson、およびイギリスの歴史家 G.M. トレヴェリアンの言を交えながら概観すると、およそ次のようになる。

すなわち、19世紀中葉の啓蒙家のなかで、アーノルドは当時のイギリス社会を最もよく知っていた。アーノルド自身は中流階級に属していたが、視学官という職業柄、当時のイギリスのあらゆる地域に赴き、あらゆる社会階級の人々と接していた。とりわけ当時のイギリスの政治的・社会的動向を決めかねないほどの勢力に台頭しつつあったいわゆる「下層中流階級」(the lower middle class)、その多くが宗教的にイギリス人の主流をなす国教徒と対峙する非国教徒であり、小規模経営者・実業家であり、またアーノルドが視察した学校の経営者であり生徒の親でもあった「下層中流階級」の人々とは密接に接し、彼らの思想的・行動的動向をも仔細に知っていた。アーノルドが同時代の啓蒙思想家カーライルと違うのは、カーライルが秩序の活路を上流・貴族階級に求めたのに対し、アーノルドはそれを階級を超えた公平な立場に立って社会全体に求めた点にある[3]。

アーノルドがいう「無秩序」は、およそ次の２点に集約されるであろう。すなわち「無秩序」(混乱）とは、大きく「政治的・社会的無秩序」と、その無秩序を産み出している人々の「精神的無秩序」である。

政治的・社会的無秩序

一体に、アーノルドが生きた時代である19世紀は、歴史上かつてない変革をイギリスにもたらした世紀として知られている。前世紀に政党政治、議員内閣制を完成して新しい政治機構を整えたイギリスは、ナポレオンをも打倒するなど相次ぐ戦争に勝利して、ヨーロッパとイギリスにおよそ100年にわたる平和を確立した。その一方でイギリスは、これもよく知られているように、世界に先駆けて産業革命を達成した国でもあった。

18世紀後半に興った産業革命は、それまでごくゆるやかに推移してきたイギリスの社会に、急速かつ大規模な社会的・経済的変革をもたらすものであった。イギリスの産業は、産業革命が始まるまでは農業や家内工業的な産業が主流であったけれども、それらはやがて高度な機械を使用する工場式の産業に取って代わられ、その結果、それまでの農業従事者たちは多くが工場労働者として都市に移住するという社会現象を生み出していた。

対外的な戦争準備をする必要のない平和で安全な時代、世界に先駆けて進展する産業革命、世界の工業の中心としてのイギリス、そしてその結果大きな社会的勢力となりつつあった中流階級と労働者階級（主として都市の産業ブルジョアジィと工場労働者）――。「大英帝国」の最盛期として知られる１９世紀中葉のイギリスに課せられた最大の課題は、増大するこれら諸

勢力をいかにして新しい政治機構・社会体制の協力者として組み込むかという点にあった。

対外的には平和な時代、そして経済的には豊かな殖産興業の時代だったとはいえ、当時のイギリス国内には、暗い部面をも含む政治・社会現象が少なからず存在していた。顕著な例を挙げれば外国貿易による利殖獲得への狂奔、その一方での人口過剰と失業、新植民地への移住などの社会現象がそれである。政治的には自由党と保守党という二大政党をはじめとする大小さまざまな政治同盟が存在し、これに階級対立、宗教対立などがからんで国論が四分五裂し、内乱の勃発まで予想される状況だった(4)。

アーノルドが『教養と無秩序』を執筆していた当時のこのような政治・社会的混乱状況は、いわゆる「選挙法」の改正にからめて典型的に見ることができる。

先に私は、19世紀は歴史上かつてない変革をイギリスにもたらした世紀、と述べたけれども、それは換言すれば、民主主義と科学思想そして実利精神の時代と置き換えることもできる。産業革命を支える科学技術の進展、年ごとにすさまじい勢いで増加する外国貿易、これらの必然的帰結として生み出された中流階級と労働者階級の地位の向上は、従来截然とあった階級間の垣根を低くし、彼らの政治中枢部への参入実現要求、すなわち「選挙法」の改正要求となって噴出したのである。

第１次の選挙法改正は1832年になされていたが、それは選挙法としてはきわめて不充分なものであった。この改正で新たに選挙権を与えられたのは中流階級のおよそ半分、すなわち主として都市の産業ブルジョアジィで、政治権力を従来からの特権階級である地主とこの産業ブルジョアジィで分かち合うというものだった。これでも有権者は当時の人口のわずか３％だったという数字が、この選挙法の不備を物語っている。

第２次の選挙法改正は1867年になされ、新たな有権者として都市の労働者、手工業者（それも成年男子のみ）が加えられた。が、この新たな法案も、事態が順調に推移した結果生まれたものとは到底言えなかった。法案の内容がまだ著しく不備、例えば農村や鉱山の労働者は有権者として含まないなど内容が不備だったのに加えて、前年66年に一旦否決されているのである。これに怒った民衆のデモ隊が全国に溢れ、ロンドン市内の広場や公園はデモ隊で騒然たる状況を呈していたなかでの法案成立であった。

アーノルドが『教養と無秩序』をほぼ書き終えてその「序文」を書いていたころ、すなわち68年には新たな「改正法」に基づく選挙が行なわれ、下院は圧倒的に自由党員に占められ、グラッドストーンが史上初めて非国教徒を閣内に入れ組閣していた。『教養と無秩序』はその翌年、すなわち69年の１月に出版されている。

平和が確立され、対外的な戦争準備に追われる必要がなかったがゆえの国内的混乱であったが、当時のアーノルドが直面していた政治・社会的状況は、およそ以上のようなものであった。

精神的無秩序

アーノルドにとって如上の政治・社会的状況は黙過し得ない深刻な問題であったけれども、それ以上に重要だったのは、むしろそのような現象の根底に潜むもっと本質的な問題、つまりイギリス人の「心の無秩序」の問題であった。

当時の人々の心に混乱をもたらしていた要因、それも主として思想的要因はいくつかあった。例えば政治哲学者J.S.ミルや『種の起源』で知られるダーウィンの思想的影響である。ミルはすべての男女が選挙権を持つべきことを説き、自由を論じ、功利主義を鼓吹し、その著作は19

世紀中葉当時の知識人に広範な影響を与えた。

一方『種の起源』は『教養と無秩序』に先立つこと10年前、1859年に出版されたものであるが（ミルの代表的著作『自由論』も同年出版されている）、その生物進化論・自然選択説は、産業資本主義が発展しつつあった当時の社会に思想的に大きな影響を及ぼすものであった。例えば進化論は、社会の進化（進歩）は必然であるとする思想に論理的根拠を与え、自由競争による繁栄追求を是認する潮流を社会に持ち込んだのである。いわゆる「社会ダーウィニズム」と言われるものがそれである。

が、思想的混乱が著しかったとはいえ、当時の社会と人々の心を根強く支配していたものは、やはり宗教であった。そして「心」の問題の端的な例を、私たちは宗教に対するアーノルドの姿勢をとおして窺い知ることができる。

過去も当時も、ずっと長きにわたってイギリス人の心を支配してきた宗教――イギリス人の心に狭量と偏見を固着せしめ、さまざまな対立と混乱を惹起せしめる誘因となってきた宗教は、人々を階級や偏見を超えた新たな教養観に導かんとしたアーノルドにとって、避けて通ることのできないやっかいな問題であった。アーノルドが宗教をいかに強く意識していたかは、『教養と無秩序』の「序文」の冒頭で宗教に触れている点からも窺えるであろう。

『教養と無秩序』発刊当時のイギリスでは、過去の歴史においてもそうであったように、宗教の違いが政治・社会的差別と重なりあって人々の深刻な対立を生んでいた。それは端的に言えば国教徒と非国教徒の対立である。非国教徒とはイギリス国教会から離脱したプロテスタントをいうのであるが、これはいくつかの会派に分かれていた。なかでも最も影響力を持っていたのが「メソジスト派」である。

18世紀に興り、非国教の会派の中で最大の規模となって普及したメソディズム――国教会から分かれた新興宗教で、どちらかと言えばイギリスの大衆社会、すなわち下層中流階級や労働者階級といった社会から疎外された人々から支持されたメソディズムが18世紀に普及して以来、メソジスト派を含む非国教徒は、将来の国の運命をも左右しかねないほどの勢力にこの当時なりつつあった。

1867年の第２次選挙法改正で選挙民の過半数を占めるにまで至った非国教徒、早晩国の運命を担うであろうこれら非国教徒を、その「心」の無秩序ぶりからいかに解放すべきか。アーノルドの主たる関心は、まさにこの点にあったと言ってもよい。先にも触れたが、とりわけ視学官としてのアーノルドが密接に接した非国教徒たち、すなわち小規模経営者・実業家であり、またアーノルドが視察した学校の経営者であり生徒の親でもあった彼ら「下層中流階級」の人々の無知ぶり、アーノルドが描く「教養」には程遠い粗暴ぶりが、アーノルドが『教養と無秩序』を書く動機となったからである[5]。

イギリス社会は現在もそうであるが、宗教は人々の心と社会の有り様に複雑に、そして根深く関係している。宗教はしばしば階級と結びつき、政治的・経済的・社会的差別、さらには教育的差別と重なって、偏見と対立、社会の混乱・無秩序を助長する要因ともなっている[6]。神聖であるべきはずの宗教は、その一方できわめて世俗的なもの、あるいは現世的なもの、例えば政治的・経済的利害とも密接につながっているのが実態である。イギリスにおいては、宗教は、過去も現在も、常に言わばこの「聖俗」を併せ持った役割を演じてきた。今日でもプロテスタントとカトリック教徒が相争う北アイルランドの深刻な政治・社会状況を見れば、このことは容易に首肯されるであろう。

教養を「人格の完成」(human perfection)であるとし、新しい教養観・価値観でもってイギリスに社会の「秩序」と人々の心が依るべき「権威」を打ち立てることを願ったアーノルドにとって、この宗教の問題は克服されるべき根本問題であった。宗教にも造詣が深く、宗教思想家としても著書をとおして当時の社会に多大な影響を与えていたアーノルドは、宗教がその長い歴史をとおしていかにイギリス人の心に深く浸透し、宗教がいかに離れがたく政治や社会の有り様と結びついているかを知っていたからである。

結論的に言うと、アーノルドは決して宗教を否定したのではない。宗教の意義、歴史的役割を認めつつも、一方で宗教が余りにも長く、深く、狭量偏頗な形で人々の心を支配してきたことを指摘し、新しい時代の精神は「古代ギリシャ的精神」、審美的価値を重んずるあのヘレニズム的精神に依るべきことを説いたのである。人々の心に狭量と偏見を固着せしめ、さまざまな対立と混乱を惹起せしめる誘因となっている宗教的党派心を超えて新しい価値観の世界、すなわち「優美と英知」(Sweetness and Light) の世界に人々を導かんとしたのである。

留意すべきは、『教養と無秩序』は、当時のイギリス社会を悲観し、絶望視した結果書かれたものではないという点である。アーノルドは、いわゆる日本の隠者と異なって、世間と隔絶して筆のすさびに身を任せるといった性向の持ち主では決してなかった。アーノルドは、視学官として社会のさまざまな現実に深く接しながら、「心」の拠り所なく混乱・推移する世情を眼前に見て、けだし年来の本懐であった審美的教養観をものする契機としたのである。

アーノルドはもともと詩人であり、数か国語に通じたたいへんな読書家で、イギリスの詩のみならず古代ギリシア以来のヨーロッパ大陸の詩、例えばフランスやドイツの詩にも深く通じ、それらを原語で深く観賞できるほどの豊かな詩的教養の持ち主だった。いくつかの詩論・詩人論を遺しているが、その言及はイギリスはもちろんのこと、古代ギリシャ、イタリア、フランス、ドイツなどに及んでいる。

事象を本来の姿で見ようとする詩人から見れば、現実がむしろ仮象で夢 (理想) のほうが現実ということもあり得るのである。アーノルドは、混乱する当時の政治・社会現象をつぶさに見ながら、これら時事的問題に託して夢 (理想) を語ったのである。それも時事的問題にことよせて人類にとって永遠・普遍の夢を——

以上『教養と無秩序』中の「無秩序」を、「政治的・社会的無秩序」と「精神的無秩序」の視点から考察してみた。最後に、当時の社会状況および『教養と無秩序』執筆にかかわるアーノルドの基本的姿勢を Dover Wilson が簡潔に指摘しているので、それを引用して結びとしたい。

It is not to be supposed that Arnold really thought, with Carlyle, that England in 1869 was about to plunge into a whirlpool of anarchy. What he did was to use certain anarchical tendencies and lawless incidents of his own day, due to a temporary phase of intense political excitement, as illustrations of the deep-seated *spiritual* anarchy of the English people, an anarchy which expressed itself in its hideous sprawling industrial cities, its loud-voiced assertion of personal liberty, its dismal, stuffy, and cantankerous forms of Christianity, its worship of size and numbers and wealth and machinery generally, its state-blindness, and its belief in collision (collision of parties, of sects, of firms) as the only way of salvation[7].

（1869年のイギリスが無秩序の渦にまさに突入せんとしていた、とアーノルドがカーライル同様本気で思っていたと考えるべきではない。アーノルドは、激しく揺れ動く政治的時局に起因する当時の無秩序的傾向や無法な事件を無秩序、例えば乱開発されてゆく産業都市、個人の自由の声高な主張、陰鬱でゆがんだキリスト教の姿、規模・数量・富・機械への一般的崇拝、状況音痴、救いの唯一の道は対立（党派や会社の対立）にありとする思い込みなどに現われている無秩序を、イギリス人に深く根ざした「心の」無秩序の例証として用いたのである。）

注

(1) 『大分県立芸術文化短期大学紀要』、第33巻、1995。

(2) 例えばわが国の教育の基本方針を定める文部省の審議会、例えば臨時教育審議会や中央教育審議会、あるいは大学審議会のこれまでの答申に、かつて詩的教養あるいは文学的教養を強調する審美的教養論が登場したことがあっただろうか。また近年わが国の大学において教養課程の廃止・縮小にともなって教養についての言及が多々見られるようになっているが、アーノルドのように教養を詩とからめて論じているような審美的教養論は、私の知るかぎりまず皆無である。例えば近年出版され評判になった筒井清忠氏の『日本型「教養」の運命』（岩波書店、1995）、あるいは阿部謹也氏の『教養とは何か』（講談社、1997）などでもアーノルドへの言及はない。せいぜい「哲学を教養教育の核としなくてはならない」とする今道友信氏の傾聴に値する提言があるくらいである（『ＩＤＥ現代の高等教育』、No.370、大学と教養、1995年10月号）。教養の本義を詩的教養であるとし、詩を政治や社会との密接な関連において論じた教養書は、残念ながらほとんど例を見ないのである。

(3) Matthew Arnold, *Culture and Anarchy*, ed. J. Dover Wilson, Cambridge UP, 1935, rpt, Editor's Introduction.

(4) G.M. トレヴェリアン『イギリス史３』、大野真弓監訳、みすず書房、1975。

(5) J. Dover Wilson (ed.), op. cit., Editor's Introduction.

(6) 17世紀の王政復古直後（1661～65年）に出された「クラレンドン法典」以来、国教会から離れた非国教徒は異端視され、集会を禁じられるなどのさまざまな制約や差別を受けていた。一例を挙げれば、オックスフォード・ケンブリッジ両大学からの非国教徒排除である。両大学は国教徒のための大学とされ、ほとんどの学寮が非国教徒に対して門を閉ざしていた。非国教徒が政治的に解放されたのは「第２次選挙法改正」（1867年）からであり、両大学が非国教徒に門戸を開いたのは漸くその４年後、1871年であった。非国教徒は、実に200年間にわたって厳しい弾圧を受けていたことになる。

(7) J. Dover Wilson (ed.), op. cit., Editor's Introduction.